

# 伝承の系譜 山崎正之

—『源氏物語』と「浦島伝説」—

たとえば『源氏物語』夕霧の巻につきのような一節がある——

……御佩刀にそへて、経箱を添へたるが御傍も離れねば、

恋しさのなぐさめがたきかたみにて涙にくもる玉のはこかな

黒きもまだしあへさせ給はず、かの手ならし給へりし、螺鈿の箱なりけり。誦経にせさせ給ひしを、形見にとどめ給へるなりけり。浦島の子がここちなむ……

光源氏の長男夕霧は、亡き親友柏木の未亡人である落葉宮に心をうばわれていた。そのあまりの執心さに悩み苦しんだ拳句の果てに、宮の母御息所は急死された。夕霧は北の方雲居雁の動向に気を病みつつも、小野の里から強引に宮を都に戻し迎えようとした。すっかり周囲をかためられては宮ひとりの反対もならず、泣く泣く従わざるを得ない状況に追いこまれた。

車に運んだ母の形見の品に、螺鈿の箱があった。守り刀と共に身近に置きそえた経箱なのだったが、いま都に帰ろうとする宮の心境は、あたかも玉匣を抱えている「浦島の子がここち」ではなかったろうか、というのだ。この場面で、落葉宮をめぐって浦島伝説の登

場をみることに、いささかスポットを当ててみたい。

浦島の子が望郷の念やみ難く、海神の宮殿（竜宮）から故里にもどりたいと告げた時、海神の女（乙姫）は、再びこれまでと同じ生活しようという気持があるならば、絶対に開いてはならない、と玉匣を手渡した。その後の経過はあらためて記すまでもないところだが、海神の宮殿での生活を僅か三年と数えていたのに、地上時間三百年という途方もない落差の前に立たされた彼には、もはや玉匣を開くよりほか何のてだてもありはしなかった。（——浦島伝説そのものの経緯については、本誌に報告した古代文学研究のゼミナールの方でお読みいただきたい。）

『源氏物語』の作者は、どのような心情を落葉宮と浦島の子との間に通わせていたのであろうか。久方ぶりに都へ帰るにあたって、母の形見の箱を持って行くその様子が、玉匣を手にして帰郷する浦島の子に似ている、ということも確かに認めてよろしいようだ。しかし、「浦島の子がここち」といったときの「ここち」の内容について、考えてみたいのである。

その前提に、「源氏物語」成立期における浦島伝説の伝播状態を

一瞥しておく必要があるだろう。当時までの文献に見出すことの出来るものとしては、『日本書紀』巻第十四・雄略紀二十二年秋七月条、「丹後国風土記逸文」、『万葉集』巻九・一七四〇番歌、平安時代に入って前期の漢文伝において「浦島子伝」・「続浦島子伝」といったところが主な作品である。またこうしたもののほかに、口承伝承として語り継がれていた話もあったことだろう。

そして『源氏物語』の作者は、それらのいずれにも接する機会を持ち得たと思われる。いや、作者本人に限るまい。物語の読者たちにとつても、浦島伝説は周知のストーリーでなければならなかったはずだ。当時の物語の読者層の多くが後宮を中心とした、女房をはじめ、女性であったことを考えると、直接に漢文伝を読むという事態より、口承からの享受とみるのがもっとも順当なところだ。

内容の点、漢文伝の神仙思想による修飾文は、前代の『日本書紀』・「丹後国風土記逸文」の系列と並んで、読む手続を通じはじめてその存在を示すものといえる。現存文献のなかでは『万葉集』のケースが、もっとも口承のおもかけを残し伝えていてと考えてよいのではないだろうか。ここでは一応そのように押えることが出来るとしても、当時ポピュラーであった浦島子伝説が、『万葉集』の歌のままであったかどうかについては不明というほかはあるまい。

問題は、いま本意とはうらはらに、小野の里から都に帰郷させられる落葉宮の心境なのである。

浦島の帰郷について『万葉集』の歌では、

——しましくは 家に帰りて 父母に ことも語りひ 明日のこと われは来なむと……

とある。参考のために、他の文献を見ておくと、「丹後国風土記逸

文」では、

「僕、近き親故しき俗を離れて、遠き神仙の堺に入りぬ。恋ひ着ひ忍へず。輒ち軽しき慮を申べつ。望はくは、暫し本俗に還りて、二親を拜み奉らむ」

と記し、「浦島子伝」では、金殿玉樓での生活にもかかわらず目みえて衰弱して行く島子に、神女みずから帰郷を勧めている。それに対して島子が、

——魂浮「故郷」。涙浸「新房」。願吾暫帰「旧里」。即又欲「来」仙室。……

と応えている。「続浦島子伝」も、経過としてはほとんど変わらぬ（ただし、神仙的雰囲気の色合いは一層深められている）が、島子の「答曰」の中に前記の言辞はない。

これらに共通する明らかな傾向は、浦島自身のおもいとして、帰郷を願う心情が熱烈にあふれ出ていることだと指摘されよう。そうになると、落葉宮の心情とはまったく相違するとしなければならぬ。浦島の気持にはいまひとつ、両親に会いたいという具体的な願いが提示されているが、それとても落葉宮には母御息所をうしなつたばかりであり、やはり事情は異なるのである。

浦島の訪れ（連れられて）住んだ海神の宮殿の所在地を「常世」（『万葉集』）・「蓬山、蓬萊山」（『丹後国風土記逸文』・浦島子伝）「続浦島子伝」、『日本書紀』も同じと記す。そして其処は、前述したごとく神仙思想による理想郷の楽土の様相を持っている。帰ろうとする故里の実態と、その隔差は余りにも大きい。が、浦島の望郷の心情のまえには、いかなる事態も抗し得なかつたといふべきであろう。

それとひき較べて、落葉宮の場合はいかがであるか。母御息所の物怪にひどくわずらわされるのを嘆いて、落葉宮は比叡山の西麓にあたる小野の里の山荘に隠棲した。この場所は、後に『源氏物語』第三部すなわち「宇治十帖」の手習・夢浮橋の各巻において、横川の僧都に救われた浮舟が身を寄せたところでもあった。ここでは僧都の母と妹とが、静かに庵をむすんでいた。つまり小野なる地域の特殊性、そのおおむねが窺えるように思われるのである。

かつて「常世・常世国」は、その信仰のなかで祖霊の地であり、死者のおもむく他界・他郷と目されていた。海上他界とならんで山中他界の観想が普及し、やがてそれは仏教の西方浄土を憧憬する見解と結びついていったと思われる。従って、そこで浦島が離れようとしている海神の宮殿・常世・蓬萊山と、落葉宮の去ろうとする小野の里との共通点、のごときものを見出し、地上の現実世界として浦島の郷里と落葉宮にとつての都が存在したのではあるまいか、と考える。ここでは、落葉宮が積極的な意志にもとずいて都に帰るのではないけれども、そのことは別に、帰るにあつたの落葉宮に浦島との状況の類似を指摘したかったのかも知れない。

いささか読み過ぎのきらいを承知しつつ、私はいま一步、落葉宮の「ここち」を推測してみたい。

口承性ということで先に『万葉集』の歌をあげたのであるが、この作品の構成は三部立てになっており、浦島伝説の語り伝えられている現地を訪れた人が、そこで伝説の内容を歌い詠んだという形に納められている。あたかもプロロオグとエピロオグのようなぐあい  
にいまの現場が登場し、中心に伝説を歌う。その歌い方は、単にこの経緯をそのままに伝えるのではなく（むしろ主眼点はき

ちんと伝説内容をとらえていることになくはならない）、歌い手（作者）の感想・批評めいた言辞が加えられているところがあるのだ。

釣りに出た浦島は、興にまかせて七日も海上にあつた。たまたま海神の娘と出会い、意気投合して結婚、常世におもむいた。

——海神の 神の宮の 内のへの 妙なる殿に携はり 二人入り居て 老いもせず 死にもせずして 永き世に ありけるものを 世の中の 愚人の 我妹子に 告げて語らく……（この後に、先に引用した部分が続く）

このなかで「世の中の愚人」とは、当の浦島を指していて、いざまは作者のもので、伝説の経緯から外れたものである。不老不死の常世の国で、永久に二人で楽しい生活を続けて行くことが出来たというのに、まことにもって世にも愚かな男であるよ、この人は。だつて、そうではないか、帰りたいなどと言いつ出すのだから——という気持である。作者のなまの声がかかるのはこの箇所のみであるが、長歌の次の反歌一七四一番歌では、

常世<sup>ととよ</sup>辺に住むべきものを 剣刀己<sup>つるぎ</sup>が心から 鈍<sup>と</sup>やこの君と歌うのである。自分の心から出たこととはいいながら、何ともこの男は「世の中の愚人」であることよ、とは長歌のなかでの作者の感想を繰り返したものだ。

「反歌」とは何か。『和歌文学大辞典』によれば、「長歌でのべたことを繰り返して、律動美を感じさせようとした場合」、「内容でのべ足りない点を、角度をかえて補足する例」など、そして「長歌に比して詠嘆の気分を集中させる効果を持つ」とある。

考えられるのは、繰り返しの持つ意味として、作者がもっとも強

調したかった内容を受け取ることであるだろう。とするならば、作者は、浦島自身の心から出たことすなわち故郷に帰りたい、両親に会って事情を話して来たい、といった思いを「鈍や——」と責めているのである。ないしは、残念だと惜しんでいるといっている（そりだからといって、両親になんぞ会わなくとも構いはしないので、そのような事は忘れて、楽しく常世で暮しておればよかったのに）と取っては、また作者の意図と違ってしまふのではないだろうか。帰りたい、とこれまでは少しも思っていなかったのに、ここへ来てどうしたことか、といっているのではないか。）

私が興味ふかと思うのは、浦島の運命の岐路について、作者は帰郷の発意に見ているという点である。考えようによつては、手渡された「玉匣」を開かなければ、再び常世に戻ることが出来たはずなのであって、玉匣を開いたとき、浦島の運命が決した、ともいえない。しかし、浦島が帰りたいと言ひ出さなければ、玉匣はおもてにあらわれなかつたのは確かだ。開くも開かないも、ない。つまり、浦島が帰りたいと発意した時点で、すべては決まつたのであつた。どうしてそんな気を起こしたのか、と作者はいふのだろう。

そこで落葉宮の場合も、都の一条宮に帰郷することから、あらたな局面が展開されて行くという経路が、いかにも浦島のありようと酷似している、とみるのである。

母御息所の死に際会し、宮は一緒に死のうとまで思いつめるのだが、この時期に示した夕霧の甲意はねんごろをきわめた。いうまでもなくその背景には、夕霧の落葉宮に対する熱い思慕が燃え上がった。宮の心境としては、切実に出家を願うことに傾き、夕霧に従う気にはなれなかつた。

しかし、宮をとり囲む状況・事情は殊のほか逼迫しており、宮の帰京計画は着々と夕霧の手によって運ばれ、もはや宮にはあらがう余地はほとんど残されていないところまで追いこまれていった。

都に帰つたら、その次にはどのようなことになるか、宮にはすでに予測がついていたのであろう。宮は、それらのこともすべて承知しながら、都へ帰る車に乗つたのだつた。「世の中の愚人」、それは宮自身を指す言葉となるのである。

ここで、両者ははなはだ適確に対応するように思える。が、果たして「浦島の子がごちち」そのものを汲みとつたといひ得るのだろうか。先にも見て来た通り、「世の中の愚人」云云とは、浦島の動向を評した作者の言葉なのであって、伝説のなかのものではない、そういうことになる、正確には「世の中の愚人」は伝説のなかから除かなければいけないだろう、と考えられるのだ。

『源氏物語』が書かれた時代に、いったいどのような型の「浦島伝説」は知られていたのであるか、今日からではまったく推測の域を出ることは不可能だが、構成要素の点で、すくなくとも次のような事柄は欠落して行く——すなわち、氏族の始祖伝承的な役割を負つたと思われる部分（「与謝の郡、日置の里。此の里に筒川村あり。此の大夫、日下部首等が先祖の名を筒川の島子と云ひき」丹後国風土記逸文の場合）や、神仙思想による過度な文飾と瓊末な趣味的事項（前記風土記逸文、浦島子伝、続浦島子伝などの場合）といったものは、一般の口承による伝播の際において、必備の要素ではなかつたろう。

私の思うところ、万葉集のそれこそが大方の理解した伝説経緯とみることで、かなり接近し得ているとする。

それはそれだとしても、「世の中の愚人」と指すのはこの場合でも作者でなければおかし、ということだ。落葉宮自身が、おのが境遇を浦島になぞらえているのではない。「浦島伝説」の枠取りは、あくまで『源氏物語』作者の構想とみる側でとらえるべきものである。

一条宮に帰邸した落葉宮の前に、執拗な夕霧の迫り来る姿があった。信頼する人もいない宮の、あながちな抵抗もついに力尽きる時が来た。——「ただかたはらいたう、こどもかしこも、人の聞き思きこさむことの罪さらむ方なきに、折さへいと心憂ければ、なぐさめ難きなりけり」。父朱雀院や致仕大臣（亡夫柏木の父君）といった人々の思惑、ましてや母御息所の喪中の身であること、心が閉ざされるのは深刻な反省の結果なのだ。

私は先に、落葉宮は帰京後に起こる事態を承知していただろうと記したが、ことが現実になつたいま、動かしようのないものの重さに恐れおびえる。しかしそれが、宮の八方ふさがりの悲劇的結末を意味していることになるのかどうか。後日を語る匂宮の巻で、落葉宮は夕霧に引きとられ六条院に住居する、とある。そして夕霧は、雲居雁の許と「夜ごとに十五日づつ」通つたといひ、すっかり安定した様子に思える。思えるといつたのは、そこに宮自身の心中が語られていないからである。

これもまた読み過ぎになるかも知れない。考えようによつては、小野の里を離れたあとの宮の動向は、自分の意志とは違つて一方的に夕霧に翻弄されて来たといえなくもない。朱雀院の娘という高貴な出自、夫の死そして母の死、自分の意志など働かせようもなかったのか。当時のありかたとして、夕霧の庇護を受け入れることそれ

自体は、すこしも不自然な形ではないのだ。とはいひ、夕霧の庇護のもとにありながら、そのことでなお悲嘆の淵に沈んだままだったとしたならば、帰京を拒みきれなかった事情だったにせよ「世の中の愚人」と評されても致し方あるまい——さて、どうなのだろう。

私は「浦島伝説」にこだわら過ぎたようだ。「浦島の子がこち」といつたのは、玉匣ならぬ母の形見の螺鈿の箱を抱えて、帰京して行く落葉宮のその場面だけがクロオズアップされた、どうもそのあたりに落着きそうに思われて来た。

『源氏物語』の作者は、明石の巻で須磨の茅屋に流滴の生活を送る光源氏の夢枕に、故院（桐壺帝）を立たせるのであるが、これなどは明らかに常世から寄り来る祖霊信仰を背景にしている。その故院が疲労困憊して訪れると設定するあたり、伝承を踏まえそれを克服しようとするリアリストの面目躍如だといえる。

——そうした作者だと思えば、私はまだ一縷の望みを「浦島伝説」に持ちつつつけているのである。